

2024/8/25

ルカの福音書 講解メッセージ⑳

『ルカの福音書 8章 40-56節 死人が生き返る』

■長血の女性とヤイロの娘

「さて、イエスが帰られると、群衆は喜んで迎えた。みなイエスを待ちわびていたからである。するとそこに、ヤイロという人が来た。この人は会堂管理者であった。彼はイエスの足もとにひれ伏して自分の家に来ていただきたいと願った。彼には十二歳ぐらいのひとり娘がいて、死にかけていたのである。イエスがお出かけになると、群衆がみもとに押し迫って来た。」(ルカ 8:40-42)

神に願い出たら、神は必ず応答してくださいます。もし、ヤイロがイエス様に求めなければ、イエス様が出かけてくださることはありませんでした。大切なことは、まず神に求めることです。

「ときに、十二年の間長血をわずらった女がいた。だれにも直してもらえなかったこの女は、イエスのうしろに近寄って、イエスの着物のふさにさわった。すると、たちどころに出血が止まった。」(ルカ 8:43-44)

イエス様が出発すると、途端に多くの人々に囲まれましたが、その中に 12 年もの間病気に苦しんでいる女性がいました。彼女は「イエス様のお着物にさわることさえできればきっと直る」(マルコ 5:28) と信じ、イエス様の着物のふさにさわったところ、一瞬でいやされました。着物にさわったからいやされたのではありません。神を信頼したからいやされたのです。彼女は着物に力があると信じていたのではなく、イエス様に力があることを信じていました。神は、信頼する者を必ず助けてくださいます。「あなたは私を信頼するのか」と、神はあなたにも常に問うておられます。

「イエスは、「わたしにさわったのは、だれですか」と言われた。みな自分ではないと言ったので、ペテロは、「先生。この大ぜいの人が、ひしめき合って押しているのです」と言った。しかし、イエスは、「だれかが、わたしにさわったのです。わたしから力が出て行くのを感じたのだから」と言われた。」

(ルカ 8:45-46)

「だれかが私にさわったのです」とは、「誰かが私を信頼したのだ」ということです。信頼とは愛です。つまり、これは「誰かが私を愛したのだ」ということでもあります。神を信頼、または、愛すると、神から力が出てくるのです。神は愛です。神を愛すると、神の愛がその人の中にあふれるようになり、神の愛がその人をいやし、変えていきます。

神は私たちの愛や信頼に必ず答えてくださいます。自分のことを本気で信じた人がいたから、イエス様はご自分から力が出ていったことを感じたのです。私たちは、神を信頼すればするほど神に近くなります。主を信頼することで、平安が増し加わっていくのです。

ところで、なぜイエス様は、彼女を探したのでしょうか。それは、彼女がまだ本当の癒しを受け取っていなかったからです。それは、罪の赦しです。

罪とは神の思いに反することです。彼女の心の中にはまだ、神の思いに反する思いがありました。それは、自分を否定する思いです。それは神の思いに反することであり、罪なのです。彼女は、体の病はいやされましたが、罪の赦しという心の癒しを受け取っていなかったため、心の苦しみからは解放されていませんでした。イエス様は、ご自分を信頼する彼女を本当の意味でいやしたいと思い、彼女を探したのです。

「女は、隠しきれないと知って、震えながら進み出て、御前にひれ伏し、すべての民の前で、イエスにさわったわけと、たちどころにいやされた次第とを話した。」(ルカ 8:47)

彼女は神の前に出ることを恐れていました。自分は罪人であることを知っており、罰を受けると思っていたからです。彼女の心はまだ癒されていなかったことがわかります。「イエス様のお着物をさわったから罰を受けるのだ。自分は罪人なのだから。こんな私が許されるはずがない。愛されるはずがない。」と思っていたのです。彼女は、イエス様の前に進み出ることで、自分の罪を言い表しています。コミュニケーションとは、言葉だけであるものではありません。自分の苦しみをさらけ出すことも、罪を言い表すことになります。

「そこで、イエスは彼女に言われた。「娘よ。あなたの信仰があなたを直したのです。安心して行きなさい。」(ルカ 8:48)

これで彼女の心はいやされました。罪が赦されたことがわかったからです。

「苦しみ」というものは、すべて罪です。なぜなら、私たちが苦しむのは、神のことばを信じていない時だからです。神のことばはあなたを生かし、あなたに平安を与えます。そ例外の言葉を信じたために、苦しむのです。神は私たちの苦しみを取り除きたいと願っておられます。あなたの罪をいやしたいと願っておられるのです。

しかし、この世では多くの人が、病は自分の罪の報い、すなわち罰なのだと勘違いしています。病気になったり、悪いことが起きたりすると、多くの人が「私、何か悪いことをしたのかなあ」と考えます。この考え方は今も根強く残っていますが、当時はなおさらそうでした。そのため、長年病がいやされなかった彼女は、自分は罪深い人間なのだと自覚していたわけです。しかし、そんな彼女にイエス様は「安心して行きなさい」と言われました。その一言で、彼女は赦されたとわかったわけです。

■罪について私たちの誤り

「またイエスは道の途中で、生まれつきの盲人を見られた。弟子たちは彼についてイエスに質問して言った。「先生。彼が盲目に生まれついたのは、だれが罪を犯したからですか。この人ですか。その両親ですか。」イエスは答えられた。「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。神のわざがこの人に現れるためです。」（ヨハネ 9:1-3）

神は、病気を罪の罰だとまったく考えておられないことがわかります。そもそも病気や災いは神からのものではありませんから、神が与える罰であることはあり得ないのです。

ヨブ記を読むと、すべての災いはサタンからのものであることがわかります。私たちの体が病気になるのは、有限性の体だからであり、このような朽ちる体になったのは、悪魔の仕業で死が入り込んだからです。つまり、病気になるのは死が入り込んだためであって、神が病気にしたのではありません。この世界の天変地異や災害、災いのすべては、アダムの罪に伴って入り込んだ死が原因であると聖書は教えています。

神がしようとしておられることは、その悪魔の仕業から私たちを救い出すことです。キリストが来られたのは、悪魔の仕業を打ち壊すためです。神は私たちをさばくために来られたのではなく、私たちを救うために来られたのです。

「神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。」（ヨハネ 3:17）

「救われる」という言葉は、「いやされる」と訳すことも可能です。ですからイエス様は、長血で患っていた女性の体の病をいやし、心の病をいやされたのです。そうすることで、彼女を救ったのです。神がさばく相手は人間ではありません。神の目には、人間は被害者であり、愛する対象です。イエス・キリストは、私たちが間違っ理解していることについて、次のように言われました。

「その方が来ると、罪について、義について、さばきについて、世にその誤りを認めさせます。」(ヨハネ 16:8)

「その方」とは、聖霊様です。私たちは、さばきについても、義についても、罪についても勘違いしていて、自分では修正することができないため、聖霊様が助けて修正して下さいというのです。

「罪についてとは、彼らがわたしを信じないこと」(ヨハネ 16:9 新共同訳)

罪とは、神のことばを信じないことです。神のことばはいのちであり、力であり、私たちを生かす言葉です。ですから、神のことばを信じないと人は必ず落ち込み、苦しみを感ずます。苦しみは罪だと言われるのは、苦しみとは、神のことばを信じずに人の言葉を信じた結果、生じるものだからです。

私たちは罪というと、悪い行いのことを想像しますが、神における罪とは神のことばを信じないことです。つまり、あなたの心が苦しみを覚える時、あなたは罪を犯しているということなのです。そして、苦しみという罪の状態にあることで、苦しみから逃れようとして見える安心をむさぼる罪の行為に至るわけです。

嫉妬、殺人、戦争など、罪の行為に至るのは、見える安心を手にしたからです。そうすることで、自分の価値を引き上げようとするわけですが、それは自分のことをだめだと思っているからです。自分のことをだめだと思うのは、あなたが神を信じていないからです。この状態が罪だとイエス様は言われたのです。

「義についてとは、わたしが父のもとに行き、あなたがたがもはやわたしを見なくなること」(ヨハネ 16:10 新共同訳)

義とは、神がその人を正しいと認めることです。人は、努力してよい行いをすることが義であると思っていますが、神の前に行いで近づくことはできません。見えない神に近づくには、信じるしかないのです。つまり、義とは、行いではなく、信仰なの

です。

「また、裁きについてとは、この世の支配者が断罪されることである。」

(ヨハネ 16:11)

この世を支配しているのは、死です。この世は、有限性であり、滅びに向かっていきます。その死を持ち込んだのが悪魔です。つまり、この世を支配する者とは悪魔のことであり、悪魔がさばきの対象だということです。人間ではありません。そして、イエス・キリストが来たことによって、もう悪魔はさばかれた、悪魔の勝利はなくなったと言っておられるのです。

人間は、神にとって、さばきの対象ではなく、救いの対象です。ところが、私たちの中には、神は人をさばく方であるという考え方が根強くあって、何か苦しみに出会っていると、神が罰しているのだと考えるのです。そのようなことは決してありません。それは、神があなただをいやそうとし、神のわざが現れるための苦しみです。このことを理解し、神に救いを求め、いやしを受け取ることができれば幸いです。

■ 恐れなくてただ信じなさい

「イエスがまだ話しておられるときに、会堂管理者の家から人が来て言った。「あなたのお嬢さんはなくなりました。もう、先生を煩わすことはありません。」これを聞いて、イエスは答えられた。「恐れなくて、ただ信じなさい。そうすれば、娘は直ります。」(ルカ 8:49-50)

この世界ではあきらめるしかない出来事に対して、神は常に「恐れるな。私がなんとかする」と言われます。この世界で、どうすることもできないことの最たるものは死です。しかし、神は、それすら、生き返らせることができるのです。

「イエスは家に入られたが、ペテロとヨハネとヤコブ、それに子どもの父と母のほかは、だれもいっしょに入ることをお許しにならなかった。人々はみな、娘のために泣き悲しんでいた。しかし、イエスは言われた。「泣かなくてもよい。死んだのではない。眠っているのです。」人々は、娘が死んだことを知っていたので、イエスをあざ笑っていた。」(ルカ 8:51-53)

イエス様は人々を励ましましたが、人々はイエス様をあざ笑いました。

この出来事から、人は納得を求めているから神のことばをあざ笑うのだということを学ぶことができます。納得できないことは信じない、これは信仰ではありません。信仰とは、神が言われるから信じるということです。納得したものを信じるのは、理性です。それは、信仰ではありません。しかし、私たちは、どうしても納得を優先してしまうのです。

そもそも、人の理性には限界があります。どんなに科学が進んだ現代でも、わからないことがたくさんあります。ですから、すべてを納得するのは不可能なのです。私たちは、神が造られた作品を通して、神のすばらしさ、その奥深さを知っています。ですから、科学が進歩すればするほど謙虚になるべきです。神の前にへりくだり、神のことばをただ素直に信じるという態度が必要です。「この子は死んだのではない。眠っているのだ。」というイエス様の言葉を聞いてあざ笑った人々は、納得を優先させて、納得できないから信じられないという態度を取っています。それに対してイエス様は、何も言わずに死人を生き返らせました。

「しかしイエスは、娘の手を取って、叫んで言われた。「子どもよ。起きなさい。」すると、娘の霊が戻って、娘はただちに起き上がった。それでイエスは、娘に食事をさせるように言いつけられた。両親がひどく驚いていると、イエスは、この出来事をだれにも話さないように命じられた。」(ルカ 8:54-56)

この場面で重要なのは、イエス様が「子どもよ。起きなさい。」と言ったことです。この言葉を聞いて、女の子は起き上がりました。

これは、神が私たちに示しておられる型です。それは、私たち死んでいる者は、神の声を聞いて応答することによって、生き返るのだということです。死人を生き返らせるのが神の福音です。

死んでいるのは、この女の子だけではありません。神の前ではすべての人が死んでいます。私たちは生まれながらに死の体を持って生まれてきました。この体で神の国に入ることは、誰もできません。私たちが永遠の世界に入るためには、朽ちない霊のからだが必要なのです。

聖書は、アダムにあってすべての人が死んでいると教えています。女の子は、イエス様の声を聞いて起き上がりました。この個所は、イエス様は死んだ者をよみがえらせることができることを教えています。神の声を聞いて、それに応答するなら生きるものになるのです。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことなく、死からいのちに移っているのです。まことに、まことに、あなたがたに告げます。死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。そして、聞く者は生きるのです。」(ヨハネ 5:24-25)

死んでいる者が神の声を聞き、応答する者は生きるという奇跡、それは今だと言われています。神と私たちの接点は、今だけです。過去でも未来でもなく、私たちは瞬間瞬間神と交わることができます。つまり、私たちは、神の呼びかけを、心の奥底で今聞いているのです。その呼びかけに応答するならば、この女の子が生き返ったように、私たちも生き返ることができます。

そして、生き返った者は死からいのちに移されます。つまり、永遠のいのちを持つようになるのです。すると、父なる神とイエス・キリストを信じることができるようになります。こうして救いの自覚を持つことができるようになります。救いは心の奥底でなされますから、救われたかどうか人には見えません。しかし、神のことばを聞くと、その人は神のことばを信じることができるようになっていきます。

イエス・キリストを信じる者は、すでに永遠のいのちを持ち、死からいのちにうつっています。それは、神のことばを聞いて応答したからです。

私たちは皆、死人が生き返るといふ、この女の子が体験したのと同じ奇跡を体験しました。死んでいたのが生き返ったから、今、イエス・キリストを信じているのです。

「その永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストとを知ることです。」(ヨハネ 17:3)

永遠のいのちを持つということは、イエス・キリストを知ることです。つまり、イエス・キリストを信じている人は、すでに永遠のいのちを持っています。

人は救われた瞬間は自覚がありません。しかし、イエス・キリストを信じられたことで、救われていたということを確認できます。この女の子と同じ経験をしたのです。

私たちは死んでいたのが生き返った者なのです。信じられないかもしれませんが、これが事実です。あなたの将来は確定しています。あなたは死からいのちに移されて、神の国に入っています。もう出ることはできません。あなたの国籍は天になりました。これはもう変えられません。

ですから、あなたはもっともっと神の国のことを思って生きるべきだとイエス様は言われます。神の国と神の義をまず第一に求めなさい。この世界のものはすべて消え

てなくなります。しかし、なくならないものがあります。それは、神を愛する心です。この世界で、どこまで神を信頼できるか、どこまで神を愛せるか、それを目指して生きていきましょう。